

阿佐ヶ谷神田伊織会 第1回公演

開催日：2021年12月19日（日）14時開演

場 所：阿佐ヶ谷ワークショップ

演 目：第一席 玉川上水の由来
第二席 並木路子

● はじめに

“阿佐ヶ谷ワークショップ・神田伊織を育てる会”の企画で当初9月に開催予定であった第1回公演が、コロナ感染の影響で延び延びとなっていたのがこの暮れになってやっと実現した。

第一席の「玉川上水の由来」は第1回公演の企画段階の時に決まっていたもので、玉村和巳氏が主宰する“里山ウォーキングクラブ”がこの公演を契機に玉川上水の起点から終点までのウォーキングを計画されていたことから、今回の公演では玉村氏からの呼びかけもあって里山クラブのメンバーから8名の参加があり、公演の参加者21名のうち3分の1以上を占めた。

● 第一席 玉川上水の由来 （古典）

玉川上水の由来については分かっていないことも多くあり、分かっていないことがかえって創作の余地があるというマクラから始められた。

玉川上水の工事も九分通り進み、四谷大木戸まであと1里余りを残すだけとなったが、公儀からの資金も尽きた後、自宅の家屋田畑をも売り払って充てた資金も尽き、人夫に支払う金もなく、万策尽きた庄右衛門が一人家にいるところへ、按摩の松の一が通りかかる。

体を揉んでもらっているうちに、松の一に世間からの庄右衛門兄弟に対する非難の声を聞かされ、その誤解を解くために庄右衛門は事実を語る。

それを聞いた松の一は庄右衛門の実直さに心を打たれ、自分の身の上話を語り、座頭になるために30年かけて三百両貯めた話をして庄右衛門宅を辞する。

そこへ金策のため方々駆け回っていた弟の清右衛門が戻って来て万策尽きたことを報告する。

工事人夫の賃金が払えないと、人夫たちはこれまで掘ってきた上水路をぶち壊すと騒いでおり、兄弟は自分たちの首を差し出すことで上水路を守る決意で人夫たちのところに向く。

金が払えないことを知った人夫たちは騒ぎ出し、あわやというところへ、風呂敷包みに包まれた三百両の金が届けられ、そこには按摩の笛が添えられていた。

工事は無事完成し、庄右衛門兄弟は四谷に住んでいると言った松の一を捜し求めるがその行方は一向に知られないままとなる。

● 第二席 並木路子 （ネタおろし）

戦後一世を風靡した「リンゴの唄」で有名な並木路子の生涯の話であるが、そのマクラで「リンゴの唄」も、ましてや並木路子の名前も知らない人が増え、知識の共有がないと話も進めにくくなっているが、師匠の神田香織が戦争の語り部として創作作品を演じているのを引き継いでいきたいという気持からこの作品は生まれている。

並木路子は、東京大空襲で母親を隅田川で亡くし、父と兄も戦地から帰国の途路の船が撃沈され水死し、肉親三人が水に関係して死んだ挿話を通して戦争（の悲劇）が語られる。

戦争をそのままを語るのではなく、一人の人気歌手であった女性の生涯を通して、隠れたテーマとしての戦争を語る創作で、何気ないように挿入された戦争の話がかえって強烈に心に残る作品である。

● 懇親会

終演後、有志が残った懇親会には半数以上の観客が参加した。

「玉川上水の由来」に関しての話題のなかで、按摩の松の一の三百両に関して意見が分かれた。その一つは、庄右衛門が松の一を殺して三百両を奪う方がドラマティックになるというものがあった。

それに対して、美談としての講談が損なわれることから、今回の終わり方のほうが気持ちがすっきりするというだけでなく、話の筋として終わり方も素直に読めるというものであった。

個人的には、按摩の正体が実は、庄右衛門の世間の評判からその真実を探るべくして変装した人物であるという想像も浮かび、水戸黄門的発想が思い浮かんだ。

また、玉川上水に関連して玉村氏は、江戸の水道に関しての話なら2時間でもできると、神田上水の話から淀橋浄水場にまで話が進展した。

江戸時代の水道は当時世界一で、同じ時期のイギリスのロンドンなどでは生水は飲めず、子供もビールを水で割って飲んでいたりしたことなども話題として出された。

阿佐ヶ谷ワークショップ理事長の佐竹徹氏が用意された赤ワインと、手ずから拵えた料理のおでんなどに舌鼓をうちながら、和やかな気分のうちに歓談が弾んだ。

(2021年12月20日、広報担当・高木登記)